

岡山市街地の治水の要 300年前の構想を受け継ぐ

ひゃっけんがわ 百間川河口水門



百間川は岡山城下を旭川の洪水から守るために、岡山市中島と竹田の間で分流し、操山の北から東を巡り米田付近から南流して沖新田の南端で児島湾に注ぐように造られた放水路です。

岡山城下は文禄3年（1594）、岡山城の防御の目的で旭川の流路を不自然に付け替えたため、度重なる洪水の被害を受けてきました。特に承応3年（1654）の洪水後に熊沢蕃山は岡山藩の土木技術者津田永忠に越流堤と放水路を組み合わせた「川除けの法」を伝えたとされています。

津田永忠は竹田の旭川堤防に大荒手を設け、それを越した洪水処理のために放水路堤防も築造しましたが、その後に発生した洪水によりそれまでの築造の欠陥が明らかにされるとともに、年々の土砂で埋まってきた旭川も洪水の危険性が高まってきました。そこで貞享3年（1686）荒手を三段方式にする改造で、下流の被害を軽減させました。

また、百間川の下流で沖新田の干拓が進むと、洪水の遊水池として「大水尾」を設けるとともに、そこに溜まった洪水を速やかに海に排水するため、沖堤に石樋・唐樋が設置されました。こうして百間川の河口部分は築造以来堤防と6カ所の樋門で締め切られていました。

しかし、明治以降の相次ぐ洪水や戦後の岡山の発展に伴い、より高い洪水への安全性が求められていました。こうしたなか、昭和36年（1961）の第2室戸台風による災害と百間川改修方針の決定を契機に、河口水門の新設が計画されました。昭和38年、百間川河口水門工事は着手され、水門との取付部分および旧樋門締切部分に延長895mの新堤が築造されました。あわせて丈夫な堤防、安全に渡れる橋梁、多様に利用される高水敷などが整備され、百間川河口部は大きく姿を変えました。

その後、岡山市をはじめとする氾濫区域内の経済的・社会的変化等による治水安全度の向上の必要性から平成4年に治水計画が見直され、平成9年に百間川分流量に対応した堤防が概成、平成17年度に砂川の関連改修区間が完成しました。また、百間川河口での流下能力不足を解消するために、平成13年から14年の歳月をかけて新たな河口水門の増築が行われました。先人の知恵と技術、多くの人々の労を結集して築き上げた遺産、百間川はより安全で潤いに満ちた水辺として次世代に受け継がれていくことでしょう。



百間川河口水門

位置図



昭和の水門

水門の全長：138.0m（径間長 23.0m × 6門）
 純 径 間：20.0m 敷高：H.p - 2.20m
 扉高：6.00m（H.P+3.80m - H.P-2.20m=6.0m）
 ゲート天端高：H.P+3.80m（旧計画高潮堤防高）
 ゲート引上げ下端高：H.P+3.65m（旧百間川計画堤防高）
 揚程：5.85m ゲート形式：シェル構造ローラゲート
 開閉装置形式：電動単ドラムワイヤロープ巻取式
 管理橋 形式：ポステンT桁橋 橋長：136.6m 幅員：4.0m
 事業期間：昭和38年～昭和42年度

平成の水門

水門の全長：113.7m（径間長 37.9m × 3門）
 純 径 間：33.4m 敷高：H.p - 2.20m
 扉高：6.90m（H.P+4.70m - H.P-2.20m=6.9m）
 ゲート天端高：H.P+4.70m（計画高潮堤防高）
 ゲート引上げ下端高：H.P+3.95m（百間川計画堤防高）
 揚程：6.15m ゲート形式：ライジングセクターゲート
 開閉装置形式：油圧モータ・ラック式（片側4台駆動）
 管理橋 形式：3径間連結連続PCポステンT桁橋
 橋長：113.7m 幅員：7.0m
 事業期間：平成13年～平成26年度



かつての石樋を模した沖新田干拓三百年記念碑
 河口水門建設前の沖堤には、海水の進入を防ぐとともに出水の際には速やかに排水するため、石樋が設けられていた。



百間川河口水門増築完成に伴い、旧河口水門群の石を用い、唐樋をモチーフとした排水樋門が復元された。